

筋トレ



シェイプアップ



春日信彦

目次

筋トレ 1

筋トレ

筋トレ

スポーツ嫌い

4月7日（火）。緊急事態宣言発令。アンナとさやかは、いつものようにキッチンで鉢合わせになると罵り合っていた。不要不急の外出を自粛するようになって、家庭内は一層イラ立っていた。スポーツ好きのアンナは、自宅で筋トレをやっていたが、スポーツ嫌いの亜紀は勉強に没頭し、歌好きの拓実はカラオケに興じていた。アンナは、二人のだらけた姿を見るとますますイラ立つのだった。手始めに、亜紀に、スポーツ音痴でもできそうなゴルフを習わせてみたが、結局、1年もしないうちにやめてしまった。次に、テニスとスイミングスクールに通わせたが、面白くないと言ってはさぼってばかりだった。3月からスクールがお休みということで、自主トレをさせようとしたが、全くやろうとしなかった。

テーブルに腰掛け頬杖をついたアンナは、さやかに愚痴をこぼし始めた。「まったく、亜紀ったら、性根がないんだから。さやか、どうにかなんない？ 拓実といい、亜紀といい、どうして、根性なしなんだろね。あれじゃ、イジメの格好の的になるんじゃない。まったく、いやになっちゃう」さやかは、アンナの性格からすれば、亜紀と拓実のスポーツ嫌いにムカつくのは当然だった。アンナは、児童養護施設に預けられたころから、男子以上に活発で、男子と喧嘩しても負けたことがなかった。体格も女子としては大柄で、勉強嫌いではあったが、スポーツは万能だった。

さやかは、いつもの愚痴を聞かされうんざりしたが、話し相手をしてやらないとヒスを起こし、亜紀に嫌みを言い始めると思い、機嫌を取ることにした。「アンナ、そうカッカしないでよ。みんな、コロナでイラ立ってるんだから。アンナの気持ちはわかるけど、人には、個性があるのよ。スポーツ嫌いでも、いいじゃない」さよかの言葉にムカついたアンナは、反論し始めた。「何が、個性よ。毎日、勉強ばっか、やってるから、ブタになるんじゃない。何よ、あの体型、まだ、13歳っていうのに、あんなにブタになって。みっともないったら、ありやしない。よくあんなんで、平気でいらること。毎日、走り込みをやれば、ウエストも引き締まって、ナイスバディになるのよ。テニスもスイミングもさぼってばっかで、バッカじゃないの」

さやかは、自分中心の考え方をしていることをアンナに何度も論したが、アンナは、全く聞く耳を持たなかった。亜紀は、おそらくスポーツには向いておらず、太る体質。太っているから、体を動かすことが嫌いになって、ますます、スポーツ嫌いになる。「アンナ、亜紀は、スポーツに向いてないのよ。スポーツができなくても、生きていけるんだし。そう、カッコしないですよ」アンナは、さやかに諭されるとますますムカついた。「ちょっと、怠け者がどうしていいのよ。女子も、強く、たくましくなくちゃ、生きていけないのよ。亜紀の将来の夢、何だったか、憶えているでしょ。戦闘機のパイロットよ。あんなスポーツ音痴が、パイロットになれると思う。笑わせないですよ」

さやかは、亜紀の援護をすることにした。「それは、幼稚園の頃の話じゃない。今は、AI ロボット工学の研究者になるって言ってたじゃない。そう、医学博士にもなるって言ってたわよ。いいじゃない、亜紀には、亜紀の道があるんだから。でも、肥満はよくないわね。無理のないストレッチをさせてみては？」アンナは、目を吊り上げて話し始めた。「何が、無理のない、ストレッチよ。アンナは、毎日、5キロ、ランニングマシン、走ってるのよ。亜紀には、1キロでいいから、走るように言ったら、100メートル走って、きつい、ア〜走れないって言って、すぐやめるんだから。問題は、根性よ。性根をたたきなおさなければ、一生、ブタよ」

亜紀の運動嫌いには、ちょっと問題がある。運動に向いていなくても、少しは、頑張るべき。さやかでも、1キロは走れた。「そうね、だから、最初から、1キロも走るように言うから、亜紀は、反抗するんじゃない。今の体型だったら、300メートルが精いっぱいじゃない。徐々に、鍛えればいいと思うよ」アンナは、今日、亜紀がランニングしたか確認することにした。「それじゃ、さやかが、300メートルでいいから、走るように、言ってよ。勉強ばかりやってたら、バカになるって、言ってちょうだい。まったく、クソ生意気なコブタ」さやかは、休校になって、毎日、部屋にひきこもっている亜紀の様子を見に行くことにした。さやかは、さっと立ち上がるとウサギのようにピョンピョンと階段を駆け上がって行った。

さやかは、コンコンとドアをノックした。「亜紀ちゃん、入ってもいい？」亜紀は、小さな声で返事した。「いいよ」さやかは、そっと開けたドアの間隙から顔をのぞかせた。ニコッと笑顔を作ったさやかは、亜紀の顔色を窺った。「勉強？」亜紀は、機嫌がいいと見えて、元気よく返事した。「はい。思った以上に、進めたから、すっごく、うれしい」さやかは、笑顔で返事した。「よかったね。でも、勉強ばかりじゃ、退屈じゃない？ 運動

もやったほうがいいわよ」亜紀は、嫌味を言われたと思い、ふくれっ面になった。「さやかおねえちゃんも、ママみたいなこと言うんだから。運動は、嫌い。亜紀には、ムリ。ママは、亜紀のことが、わかってないのよ。いつも命令ばっかして、マジ、ウザイ」

確かに、アンナの言葉にはトゲがある。性格もいい方ではない。でも、スポーツに関しては、もっともなことを言っている。体を鍛えることは、間違いなく役に立つ。「亜紀ちゃんの気持ちは、よくわかるけど、運動も必要よ。今日、走った？」亜紀は、しかめっ面になって、返事した。「まだ。後で、走る」さやかは、アンナのように強制しなかった。「まあ、気が向いたら、走ればいい。アンナは、口は悪いけど。言ってることは、間違っていないと思うよ。運動は、健康にいいし、シェイプアップにもなる」亜紀は、小さくうなずいた。「あのね、亜紀、再来年、飛び級試験を受けることにした。先生が、”亜紀だったら、合格できる”って、言ってくれたの。合格すれば、15歳から、大学。絶対、合格して見せる。さやかおねえちゃんも、応援して」

さやかは、笑顔で返事した。「そう～～。頑張る。合格すれば、ママも喜ぶわよ。天国のパパも」亜紀は、首をかしげて返事した。「ママが？ ママは、嫌みばっか。勉強して、何になるのとか、勉強ばっかやってたら、バカになるとか、全く、わけわかんないんだから。ママは、ちょっと、頭おかしいんじゃない。”平方根と大根どっちがおいしい？”なんて言うし」さやかは、噴き出しそうになったが、ぐっところえて、返事した。「まあ、アンナに、勉強のことは、ムリよ。アンナ、口は悪いけど、心は、やさしいのよ。スポーツをやりなさいというのは、亜紀ちゃんの健康のことを考えて言ってるんだから。肥満は、よくないと思う。少しずつでいいから、運動しよう。さやかも応援するから」

4

さやかもアンナのようなお説教を始めたとしかめっ面で返事した。「え～～、運動苦手だし～～。亜紀は、太るタイプなのかな～～。誰に似たのかな～～。お母さんは、太ってなかったような。おばあちゃんかな～～。おばあちゃんも太ってなかったような。おじいちゃんかな～～。あ、おじいちゃん、ちょっと太ってたような。おじいちゃんの遺伝子か～～。あ～～、いやになっちゃう」さやかは、亜紀の記憶に驚いた。「え、亜紀ちゃん、おばあちゃん、おじいちゃんのことを憶えているの？」亜紀は、大きくうなずいた。「はっきり憶えている。おばあちゃんも、おじいちゃんも、とっても優しかった。なんで、お母さん、あんな優しいおじいちゃん、おばあちゃんを嫌ってたんだろう。なんで、家出したんだろう？」

さやかは、亜紀の心を垣間見た。亜紀が、今でも実母のことを思っていることに驚いた。「いろいろと、思春期には、わからないことが起きるのよ。亜紀ちゃんも大人になれ

ば、わかるかも？とにかく、肥満は、よくない。走るの300メートルでいい、ってアンナが言った。さやかも走るから、一緒に走ろう」300メートルと聞いた亜紀は、ちょっと、笑顔を見せた。「マジ、300メートルでいいの？ だったら、走れるかも。さやかおねえちゃんも、一緒。だったら、走ろうかな〜。今日は、頑張ってみる」さやかは、即座に返事した。「その意気よ。亜紀ちゃんだったら、やればできる。スリムになって、ママをびっくりさせちゃおうよ」亜紀は、勢い良く立ち上がった。「よっしゃ〜。スリムになって、ママをぎゃふんといわせてやる」

アンナは亜紀の肥満が心配になり、1年前に、かつて鳥羽が居候していた部屋を筋トレルームにしていた。二人は、向かいの部屋に向かった。亜紀は、ランニングマシンの乗るとゆっくりしたスピードで走り始めた。さやかは、亜紀の横で、軽くその場ランニングを始めた。「疲れたら、休んでいいから。ガンバ」亜紀ちゃんは、マジな顔つきで返事した。「わかった。今日は、頑張る。300メートルね。走れると思う」さやかは、やる気を出した亜紀ちゃんに笑顔を向けた。ハ〜ハ〜息を漏らしながら、亜紀は300メートル走り切った。さやかは、ほめた。「やれば、できるじゃない。しばらくは、300メートル走ればいい。そして、徐々に、距離を伸ばせばいい。よくやったじゃない」亜紀は、走れたことに満足感を抱いた。これからも、走ってみることにした。「走れた。明日も、走ってみる。さやかおねえちゃん、ありがとう」

5

無差別殺人

シャワーを浴びた亜紀とさやかは、すっきりした顔で部屋に戻ってきた。亜紀が、声をかけた。「ヤッパ、運動はいいね。ピンクも運動したほうがいいんだけど。ピンク、亜紀に似たのかな〜。いつも、寝転がって、運動しないの。ちょっと、太り気味だし。エサのやりすぎかな〜」さやかもピンクのことが心配だった。猫は、あちこち走り回るものだと思っていたが、ピンクは、すごくおとなしくて、いつも、亜紀の横で寝転がっていた。「そうね、お外に行くときも、亜紀ちゃんが抱っこしてるし、元気よく、はしゃいでいるところ、見たことないね。お友達がいらないからかな〜」明菜ちゃんちのイチゴが、たまに遊びにやってきていたが、その時も、駆け回ることはなかった。

さやかは、4月に入り、散歩をしていないことに気づき、ちょっと、散歩することにした。「コロナは、怖いけど、公園までの散歩だったら、いいんじゃない。ピンクも退屈してるかも」不安げな表情の亜紀は、小さく返事した。「でも、不要不急の外出は自粛するように、って総理が言ったじゃない。散歩はいいの？」さやかは、神経質な亜紀の顔を見つめ返事した。「緊急事態宣言が出て、近くの散歩はいいわよ。学校は休みだけど、大人は、会社に行ってるのよ。運動不足は、免疫力低下になるし、適度な運動は必要。さ

あ、出かけよう」亜紀はダウンジャケットの胸元にピンクを包み込み、部屋を出た。

二人は公園に到着すると上空を見上げた。雲一つなく、青一色だった。白いベンチに腰掛けた時、カ〜カ〜という鳥の鳴き声が聞こえてきた。ピンクは、耳を震わせ、上空を見上げた。亜紀が叫んだ。「風来坊じゃない？」さやかも上空を見上げた。上空に一羽の鳥がのんきに風に乗って飛んでいた。しばらく上空を旋回していた鳥は、次第に下降してきた。やはり、その鳥はブサイクな白いハトに見える白いカラスの風来坊だった。ベンチ横の大きな棕木に止まると亜紀たちに声をかけた。「久しぶりだな〜。家にひきこもって、何やってたんだ。たまには、外で遊ばないと病気になるぞ。コブタちゃん」コブタといわれた亜紀は、目を吊り上げて言い返した。「コブタとは、何よ。今日もランニングやって、マジ、鍛えてるんだから。きっと、ナイスバディになってみせるから。見てらっしゃい」

6

風来坊は、ケラケラ笑いながら、返事した。「そ〜〜かね。ついに、コブタもやる気になったか。まあ、3日坊主だとは思いますが、頑張りたまえ。それより、コロナは、厄介だ。コロナは、人間だけでなく、動物にも感染するからな。油断も隙もない。コブタは、感染してないだろうな？ 2メートル以上離れているから、大丈夫と思うが」全く失礼なことを言うと思った亜紀は、嫌味を言ってやった。「感染してないわよ。コロナは、性格のいい動物に感染するんだから、あんたみたいな、性悪には、感染しないんじゃない。まあ、せいぜい、人間に近づかないことね」最近口が悪くなってきた亜紀に注意した。「亜紀ちゃん、そんなこと言っちゃダメよ。お互い、感染しないように、助け合わなくっちゃ」

風来坊が、気取った口調で話し始めた。「世界中で人間が感染し、多くの人間が死亡している。まだまだ、感染は拡大する。この調子だと、人類滅亡だな。え、人間は、性格がいい。これは、初耳だ。だったら、なぜ、罪もない牛、豚、犬、猫、たちを殺しまくるんだろうね〜。コロナは、すべてお見通しなんだ。人間は、偽善者だということを。コロナは、動物を虐待する偽善者に天誅を食らわせているのさ。いい気味だ。ざまあ〜、見ろってんだ」風来坊の人間批判にムカついたが、事実だから情けなくなった。さやかは、コロナに訴えかけるように話した。「確かに、人間は、多くの動物を殺し続けてきた。今も、何の罪もない動物を殺している。人間ほど、性悪で、残虐な動物はいない。だから、コロナが、人間に復讐しているのかも？ でも、必ず、生物は、共生できるはずよ。コロナも、きっとわかってくれるはず」

風来坊は、人間の悪口を言ったものの、コロナに感染しないか気が気ではなかった。「でも、コロナは、話し合いができる相手じゃない。いつカラスを攻撃してくるか、わか

らない。俺の腹の内も見抜かれてるかもしれん。人間は、ワクチンを開発してるのか？一刻も早く特効薬を開発しないと、マジ、人間も動物もヤバイ。どうなんだ、さやか？」研究はなされていたが、まだ、特効薬は公表されていない。今の感染拡大の勢いからして、感染は、数千万人に及び、死者も数百万人になるような気がした。「まだ、特効薬の発表はない。どうなるんだろう。ド田舎の糸島にも感染者が出たし。ひきこもっていても、気が気じゃないわ。風来坊も、ひきこもってたほうがいいわよ。コロナは、新型ウイルスだし、分け、わかんないんだから」

7

風来坊は、ますます不安になってきた。コロナの感染が続けば、きっと、動物にも感染する。「憎まれっ子世にはばかる、というから、政治家と悪党は、最後まで生き残るだろうが、俺も、気が気じゃない。実を言うと、俺も、結構、腹黒いからな。いやな、予感がする。俺も、ひきこもっているが、飯を食わねば、死んじまうからな〜。そう、人間も、ひきこもっているうちに、死んじまうんじゃないか？」亜紀が、不安げな表情で返事した。「そうよね、ひきこもっていても、お金は、入って来ないんだから。風来坊は、残飯をあさって、生きていけるからいいけど、人間はそうもいかないし。さやかおねえちゃん、甘党茶屋も、全くお客、来ないね。倒産するんじゃない？」

甘党茶屋は、しばらく閉店することにしてた。さやかの心には、二度と開店できないような不吉な予感がよぎっていた。「そうね。今の状況では、しょうがないわね。しばらく、閉店する以外ないわね。アンナには、貯金があるから、いいけど、貯金がない人のほうが多い。その人たちは、路頭に迷うわね」亜紀は、貯金があると聞いて、ちょっと安心したが、貯金がない人のことを考えるとかわいそうになった。「政府は、ちゃんと考えてくれるの？。困った人たちを助けるのが、政府でしょ」さやかが首をかしげて返事した。「やってはいるんだろうけど、のんきなよ。今すぐ、お金をやらないと、今日のご飯も食べれない人たちもいるのよ。おそらく、政治家は、このような人たちのことがわかっていないのね」

亜紀は、大人って、何て、冷たいんだろうと思った。「今日食べるご飯がない人たちを救う方法はないの？」さやかは、深刻な表情で返事した。「弁当を、無料、もしくは、とても安い値段で提供してる業者があるみたい。でも、一刻も早く、政府が救済すべきなのよ。日本は、恵まれた国のように思えるけど、その日の食事もできないくらいの貧乏な人たちは、たくさんいるのよ。政府は、日本の貧困実体を知るべきなのよ」亜紀は、政治家の人たちの気持ちがわからなかった。「政治家の人たちは、貧しい人に同情しないの？ 助けてあげようと思わないの？」人間を憎んでいる風来坊が、ここぞとばかり、口をはさんできた。「人間は、性悪だからさ。人間は、動物より、性悪なんだ。コロナに、殺されちまえばいい」

さやかは、ジロツと風来坊をにらみつけた。「せいぜい、コロナに感染しないように、気をつけなさい。亜紀ちゃん、もう帰ろう。所詮カラスは、カラス。人間の気持なんか、わからないのよ。さあ～、帰ろ～～」さやかは、立ち上がると亜紀をせかした。帰宅すると手持無沙汰のアンナが、出迎えた。「ちょっと、二人とも、どこ行ってたのよ。コロナに感染したら、どうすんの。さやか、バツカじゃない」キッチンテーブルに腰掛けた3人は、大きなため息をついた。アンナが、また、愚痴をこぼし始めた。「やることがないって、退屈。甘党茶屋、どうなるんだろね、さやか？」さやかはあきらめ顔で返事した。「どうって、お客が来ないんだから、しょうがないじゃない。来年になったら、コロナも終息するんじゃない」

アンナは、あ～～あ、苦虫をつぶしたような表情で大きなため息をついた。「これから、何すりゃいいのさ。貯金は、あるから、どうにか、食べてはいけるけど。何か、仕事ない？ さやか、見つけてきてよ。何でも、やるからさ～～」さやかも何か仕事をしなければと考えていた。貯金に頼った生活をしたくなかった。「そうね。緊急事態宣言の期間は、ムリでも、もうしばらくすれば、働けるんじゃない。さやかも、できる仕事があれば、働く」肩を落としたアンナが、つまらなそうに返事した。「そうね。今は、ひきこもるしかない。とにかく、5月6日以降になって、考えるか」ピンクが、ニャ～～と退屈そうな鳴き声を上げた。

亜紀は、胸元のピンクを見つめた。「大人の会話って、詰まんないね。スパイダーとあそば」リビングのソファに寝転がっていたスパイダーは、耳をピンと立て、小池東京都知事の話に聞き入っていた。亜紀は、ソファに腰掛けスパイダーに声をかけた。「犬は、心配しなくて、いいのよ。コロナは、人間にしか感染しないんだから。TVなんか見てなくて、ピンクと遊んでちょうだい」いつもピンクの子守をさせられているスパイダーは、自分はピンクの親じゃないと思いつつも、ピンクに声をかけた。「しゃ～ないな。不要不急の外出自粛だから、イチゴちゃんも、こられない。遊んでやるか」スパイダーが階段に向かうとピンクも短い脚で後を追うように駆けていった。

特訓

ピンクの部屋にやってきたスパイダーは、ピンクに説教し始めた。「ピンク、よく聞くん。さっきだな～～、性悪アンナが、亜紀ちゃんのことを話していた。なんと言っていたかという、亜紀は、ますますブタになってきた。これ以上ブタになったら、みともない。毎日、運動させて、シェイプアップさせなくては、と言っていた。人間は、本

来、運動嫌いらしい。毎日走り回っている犬からしたら、滑稽な話だが、人間の肥満は、世間では、みっともないらしい。俺が言いたいことが、わかるだろ」ピンクは、亜紀ちゃんがブタになったということぐらいしかわからなかった。

首をかしげたピンクは、元気よく返事した。「わかった。亜紀ちゃんは、ブタってことね」呆れたスパイダーは、もう一度言い聞かせることにした。「亜紀ちゃんが、ブタになってきたということは間違いないが、そういうことじゃない。人間は、強くなるために、空手、柔道、剣道、合気道、ボクシング、レスリング、など、いろんな格闘技をやっている。これは、人間にしては、感心なことだ。生きるということは、戦わねばならん。戦いに勝つには、日ごろから、特訓をしなければならん。動物も、同じだ。戦いに勝つには、日ごろから、特訓をしなければならん。わかったか？」

ピンクは、大きくなずいた。「わかった。人間は、喧嘩に勝つために、毎日、喧嘩の特訓をやってることね」少しはわかってきたと思ったが、今一つ言いたいことを理解していないと腹立しくなった。「人間は賢すぎて、意味不明な運動もする。喧嘩に直接役立たない運動を楽しそうにやっている。野球、サッカー、バレーボール、ラグビー、テニス、ゴルフ、水泳、マラソン、など、動物からしたら、訳の分からん運動だ。つまりだな～～、日ごろから、体を鍛えておけば、喧嘩に強くなるということだ。もう、わかっただろ」ピンクは、笑顔で応えた。「よ～～く、わかった。人間とは、訳の分からない運動をする動物ってことね」

10

ピンクは、いまだ持って、短足で、喧嘩に弱いということが自覚できていない。スパイダーは、赤ちゃんの頃から、ピンクを過保護に育てたのがよくなかったと反省した。いつも守ってあげていたために、自分で戦ったことがない。もし、スパイダーがいなくなったら、自分の力で戦わなければならない。ピンクには、全く、その自覚がない。動物もコロナに感染しないとも限らない。スパイダーが、コロナに感染し、多臓器不全で死ぬということも起こりえる。そうなれば、ピンクは、だれにも頼れない。「まだよくわかってないようだな。人間は、手足が長くて、筋肉もかなりある。だから、喧嘩には向いている。ピンク、お前はどうか？」

突然質問されたピンクは、目を丸くした。「え、ピンクは、手足は短いけど。それって、悪いことなの？」スパイダーは、手足が短いと喧嘩に不利だということを話すことにした。「悪いとかそういうことじゃない。ボクシングを見たことがあるだろ～～。腕が長いと、パンチが届きやすい。でも、腕が短いと、相手に届かない。だから、腕が短いボクサーは、一瞬のすきに、ジャンプ力を使って、相手の懐に飛び込み、パンチをくらわすん

だ。それには、俊敏な動きと脚力が必要だ。そのために、人一倍、トレーニングをやっている。言いたいことが、わかっただろう」ピンクは、うなずいた。「要は、手が短い人は、喧嘩に弱ってことね。つまり、手が短い人は、パンチを食らうから、喧嘩をしないほうがいいってことね」

少しはわかってきたようだが、まだ、自分の立場が理解できていなかった。「腕が短いと喧嘩に不利なんだ。ピンクは、極端に腕が短い。猫パンチが、相手に届かないということだ。つまり、喧嘩に負けるということだ」納得したピンクは、返事した。「そうよね。ピンクの腕は短いから、きっと、喧嘩に負ける。だから、喧嘩をしてはいけないってことね」ピンクは、今一つ、生きていくということがわかっていない。喧嘩をせずに生きていければそれに越したことはないが、いずれ、喧嘩をしなくてはならないときが必ずやってくる。「ピンクが言っていることは、間違いじゃないが、生きるということは、戦うことだ。喧嘩に勝つということだ。逃げてばかりでは、生きてはいけない」

11

ピンクは、納得がいかない表情で返事した。「え～～、ピンクが、喧嘩するの？ どうして？ スパイダーが、守ってくれるんじゃないの？ 裏切り者」スパイダーは、その言葉を言われるのが一番つらかった。「いや、守らないとは言っていない。生きているうちは、命に代えても、ピンクを守ってやる。でも、パパが死んだらどうするんだ？ だれも、守ってくれなくなる。アンナも、亜紀ちゃんも、さやかも、所詮は、人間だ。あてにはならん。ママがいたなら、パパと同じことを言ったと思うよ。最後は、自分の力が頼りなんだ。女子であっても、強く、たくましくならなければ、生きていけない。わかるか？」

ピンクは、パパがいなくなると思うと、なんだか、さみしくなってしまった。「パパ、病気の？ 具合でも悪いの？ パパ、死ぬの？」ピンクを悲しませてしまったと思ったが、現実的にありえる話をすることにした。「いや、パパは、元気だ。でも、今、コロナっていう、殺人魔が、世界中にはびこっている。多くの人間が、コロナに殺されている。いつ何時、犬も殺されないとも限らない。あくまでも、万が一の時の話だ。パパが、コロナに殺されて、いなくなったときは、ピンクは、自分の力で戦わなければならない。その時のために、今から、喧嘩に勝てるように、特訓をしなくてはならない。たとえ、つらくとも、頑張るんだ。自分のためだ。いいな」

ピンクは、コロナに殺されると聞いて、ショックを受けたが、人間も動物も死ぬということを知った。「パパが、コロナに殺されるかもってことは、ピンクも殺されるかもって、ことね。でも、パパは、強いんでしょ。コロナと喧嘩して、負けるの？ そんなに、コロナって、強い？」話が、ややこしくなってきたと思ったが、コロナの恐怖を教え

るために話を続けた。「パパは、強いさ。でも、それは、動物にたいしてさ。コロナというのは、魔物というか、幽霊というか、宇宙人というか、得体のしれない目に見えない殺人魔なんだ。だから、百獣の王のライオンでも、簡単に殺されるんだ」

12

喧嘩しても勝てないんだったら、ピンクは喧嘩の特訓をやっても無駄のように思えた。「ライオンでも勝てないんだったら、ピンクは当然勝てないね。だったら、特訓しても、無駄じゃない。どうすれば、殺されないの？」ますます、ややこしくなってきたが、とにかく特訓させるために話を続けた。「コロナは、無敵さ。でも、コロナにも、弱点がある。それは、免疫細胞には、弱いんだ。だから、免疫力をつけることだ。つまり、自分を鍛えることさ。パパも、毎日、筋トレをやっている。ピンクも、免疫力をつけるために、筋トレをやるんだ」免疫力という初めて聞く言葉にピンクは、首をかしげた。そして、わかったようなわからないような曖昧な表情で返事した。「強くなるためのキントレって何？」

やっとわかってくれたかどうれしくなったスパイダーは、筋トレの説明をすることにした。「筋トレとは、筋肉を増やすことだ。特に、脚の筋肉をつける。今日から、猫パンチの強化のために、ボクシングの特訓をやる。たとえば、腕が短くても、フットワークがよくなれば、パンチが当たるようになる」ピンクは、聞いたことがない言葉ばかりで、頭が混乱してきた。「スパイダー、いまから、何をやればいいの？ 難しい言葉ばかりで、何が何だかわかんない。本当に、コロナに勝てるようになるの？」コロナには、勝てないと思ったが、この際、やる気を出させるために嘘をつくことにした。

スパイダーは、すっと立ち上がり、こぶしを突き上げ、胸を張って返事した。「必ず勝てる。か弱いピンクも、鍛えれば、強くなれる。勇気をもって、戦うのだ。さ、今から、あしたのジョーのように、特訓だ」ピンクは、訳が分からなかったが、スパイダーの指示に従うことにした。「スパイダー、だから、今から、何するのよ」目を輝かせたスパイダーは、ピンクを立たせた。「ピンク、立つんだ。それから、ジャンプだ」短い脚のピンクは、いとも簡単に立って見せた。でも、ジャンプの意味が分からなかった。「ジャンプって、どうやるの？」スパイダーは、ピョンピョンとその場で飛び上がり、お手本を見せた。「こうだ。簡単だろ〜」ピンクは、スパイダーを真似て、ちょこっと飛び上がった。「こんなんでもいい？」うなずいたスパイダーは、櫛を飛ばした。「そうだ。まず、ジャンプを10回やるんだ。さあ」

13

小さなジャンプを3回やったが、ふらついて、手をついてしまった。「ピンク、立ち上がれ、歯を食いしばって、頑張るんだ。ピンクなら、やれる。明日のピンクになるん

だ。さあ～～」ピンクは、もう一度立ち上がり、ピョンピョンとジャンプし始めた。10回ジャンプし終えたピンクは、ハ～～ハ～～と息を吐いた。「ジャンプって、とってもきつい。まだやるの？」スパイダーは、さらに指示を出した。「人間は、うさぎ跳びというらしいが、ピンクは、ネコ跳びをやるんだ。お手本を見せる」スパイダーは、二本足で立ち上がり、ピョンピョンとジャンプしながら、前進した。「このようにやるんだ。さ、やってみろ」ピンクは、スパイダーの真似をして、ジャンプしながら、少しずつ前進した。「うまいじゃないか。なかなか、運動神経がいい。見込みがあるぞ。この調子だ」

ピンクは、かなり疲れてきた。「もう、疲れた。休ませて」やはり、ピンクの体はなままっている。もっと早くに、鍛えるべきだった。「もう、疲れたのか。まあ、いい。徐々に、鍛えていく。ちょっと、休め」ピンクは、これから、毎日、こんなことをやらされると思うと、憂鬱になった。スパイダーが、櫛を飛ばした。「よし、始めるぞ。次は、サイドステップだ。これは、相手のパンチを交わしながら、回り込む技だ」スパイダーは、二本足で立って、ピョンピョンとジャンプしながら、左右に飛び跳ねた。「さあ、こうやるんだ」ピンクは、難しそうだったが、とにかくやってみることにした。ピンクは立ち上がり、右にびよんとジャンプした。着地できたかに思えたが、コロンと横転してしまった。

ピンクが、叫んだ。「あ、痛い。こんなのできない。ピンクには、ムズイ」最初からできなとは思っていたが、やはり、ピンクの脚の短さが災いしている。もっと、簡単な練習をさせることにした。背伸び運動をさせることにした。「それじゃ、朝起きた時にやる背伸び運動をやろう。こうだ」スパイダーは、4本足で立って、頭を下げながら背筋をそらした。ピンクは、これはできると思い、背筋を伸ばした。「うまいじゃないか。これを10回やるんだ」ピンクは、いとも簡単に10回やってのけた。最も重要な猫パンチの練習に入ることにした。「ここからが、本番だ。猫パンチの特訓だ」スパイダーは、すっと立ち上がり、左手で、2回ジャブを繰り出し、右手で、ストレートを繰り出した。「できるか？」ピンクもすっと立ち上がり、スパイダーの真似をした。

14

ピンクは、ぎこちないジャブとストレートを繰り返した。「今は、こんなところだ。毎日やれば、鋭く強いパンチが出るようになる。根気良く、頑張るんだ」嫌気がさしてきたピンクは、ハ～～と息を切らして、返事した。「え、これを毎日やるの。ピンク、できない。ピンク、ムリ」やはり、過保護に育てられたピンクは、根性がない。いきなり、叱ると、逃げ出すに違いない。やさしく、指導することにした。「そうか。そう、最初から、諦めるんじゃない。徐々にやれば、だれでも、できるようになる。今日は、これでおしまいだ。よく頑張った」おしまいと聞いて、ピンクは嬉しくなった。「やった～～。お腹すいた。ご飯はまだ？」

トムとジェリーの壁時計は、12時半を回っていた。スパイダーのお腹から、グ〜〜という音が響いてきた。「もう、こんな時間か、昼飯だな。亜紀ちゃんは、何やってるんだ。俺たちのご飯を忘れるなんて、全く、怠慢なガキだ。ピンク、ちょっと待ってろ、亜紀を怒鳴りつけてやる」スパイダーは、牙をむき出して、1階にかけていった。1階のテーブルに腰掛けた3人は、なにやらペチャクチャ楽しそうに会話していた。スパイダーが、ワンと亜紀に声をかけた。亜紀は、ハッと、我に返り、キッチンの壁時計を見つめた。「あ、いけない。エサの時間。ゴメン、ゴメン。今すぐ用意する」亜紀は、席を立つと2階に駆け上がって行った。

15

ダンス

亜紀は、スパイダーとピンクにエサを与えると拓実の様子を見に行くことにした。拓実は、食事以外の時は、ほとんど、部屋にひきこもって、カラオケで歌っていた。拓実の部屋の前に立つと”いま～あなたをさがしている～、人がいるから～、森口博子の”水の星に愛をこめて”の歌声が響いてきた。コン、コン、とドアをノックした。「拓実、入るわよ」そっと開けたドアから、中の様子を覗き見た。ピンクのスカートをはいた拓実は、いつものように、ダンスをしながら、歌っていた。「まだ、歌ってるの。1階に降りてきなさいよ。ママが、さみしがってるわよ」首をかしげた拓実は、質問した。「どうして、さみしがるの？」いつもの減らず口が始まったとムカついたが、返事した。「拓実と遊びたいからじゃない」

拓実は、即座に返事した。「僕は、遊びたくない。カラオケがいい」拓実は、全く、人の気持ちを察しないガキだとあきれた。「あのね～、カラオケもいいけど、ママの気持ちも考えなよ。ママには、友達がいないんだから。遊び相手は、拓実だけよ。”ママ、何かして、あそぼ～～”とか言ってあげれば、機嫌が良くなるんだから。拓実が遊んであげないから、亜紀に嫌みばかり言うのよ。こっちは、いい迷惑なんだから」拓実は、返事した。「ママの友達、いるじゃん。チンチクリンのさやか」呆れた顔の亜紀は、返事した。「さやかおねえちゃんだって、困ってるんだから。顔を合わせると口げんか。挙句の果ては、スパイダーにまで八つ当たり。この前なんて、ライダーキックとか叫んで、スパイダーのケツを蹴飛ばしたんだから」

拓実は、亜紀が言っている意味がよくわかっていなかった。「いったい、何の用。僕、歌いたいんだけど。早く、出て行ってよ」亜紀には、拓実の世界が理解できなかった。なぜ、家族と遊びたがらないのだろうかと思議でならなかった。普通の子供は、友達と遊びたがる。でも、拓実は、歌以外関心がない。誰とも遊びたがらない。こんな性格

では、学校生活はできない。入学式が延期になっていたが、今年から小学生。果たして、小学校に行けるのだろうか？「拓実、今年から、小学生なんだから、人と遊ぶ練習しなくっちゃ。学校に行ったら、お友達と遊ぶんだから」拓実は、学校といわれてもピンとこなかった。「学校って、どんなところ？」

16

拓実に何を説明しても理解できないということは、これまでのことでわかっていたが、学校に関しては、理解させることにした。「学校というのは、勉強するところよ。亜紀も小学校に行ったんだから。だから、頭が良くなったのよ。拓実も、小学校に行くの。いい」拓実は、勉強の意味が分からなかった。関心があるのは、歌うことだけだった。「歌は？」次から次の質問に嫌気がさしてきたが、ここは踏ん張らねばと返事した。「当然、拓実が大好きな歌もある。国語とか～～、算数とか～～、体育とか～～、音楽とか～～、楽しいことがいっぱいある。学校って、とっても楽しいところ。友達もたくさんできて、毎日がハッピーになるから」

拓実が笑顔で返事した。「歌があるの。僕、歌だけでいい。歌ったら、すぐ帰ってくる」やはり、拓実は問題児。学校に行けば、決まりがあることを教えることにした。「拓実、歌だけというわけにはいかないのよ。ほかの教科も勉強しなくちゃ。それが、決まりなの。学校には、いろんな決まりがあって、それに従わなければならないの。自分の好きなことだけって、いうわけにはいかないの。少しは、我慢しなくっちゃ。もう、お兄ちゃんなんだから。できるでしょ」拓実は、顔を左右に振った。「僕は、すぐ帰る。歌ったら、帰る。帰れないんだったら、学校は行かない。僕、学校、行かない」拓実は、不登校になると予感していたが、予感が的中した。

亜紀は、拓実の気持ちを変える方法はないかと考えてみた。とにかく、楽しいところだということを強調することにした。「拓実、学校は、とっても楽しいところなんだから。歌以外にも、楽しいことがいっぱいあるから。行ってみたら、きっと、行きたくなるから。一緒に歌ってくれる友達もたくさんできると思うよ。行くときは、お姉ちゃんと一緒にだし、友達ができたら、友達と一緒に行けばいい」ちょっと不機嫌そうな表情の拓実が返事した。「僕、友達いない。一人で歌う」これは、かなり厄介なことになった。これ以上どうやって説得すればいいかわからなくなってきた。

17

亜紀は、何かいい方法はないかと、しばらく考えてみた。拓実は、歌とダンスが好き。ダンスは、亜紀にはできない激しい運動。激しい運動をするには、強靱な筋力が必要。そうか、強靱な筋力をつけさせることができれば、いじめられなくなる。男子は、やはり、

筋力。喧嘩に役立つスポーツといえば？ 空手、柔道、剣道、合気道、ボクシング、そう、ボクシングがいい。でも、拓実が、ボクシングをやるだろうか？ ボクシングのような格闘技には、全く興味がない。ダンスとボクシングに共通するものといえば？ そう、強靱な筋力。一緒に、ボクシングをやろうとって、乗ってくるだろうか？

この前、ジャニーズに入りたい。嵐のようになりたいと言っていた。アイドルになるには、ダンスができないといけない。ダンスができるようになるには、筋力がある。そうか、ボクシングは、ダンスに役立つということ。そこを理解させれば、きっと、ボクシングをやる。まったく、理解力のない拓実がこのことを理解させられるだろうか？ 「拓実、ますます、ダンス、上手になったね。将来、ジャニーズに入れるかも？」ダンスをほめられた拓実は、笑顔で返事した。「そ～、うまくなった？ 毎日、練習してるから。必ず、嵐みたいになってみせる。おねえちゃん、応援してね」亜紀は、もっと褒めて、調子に乗せることにした。「応援する。小学5年生になったら、オーディション受けてみたらいい。合格するかも」

合格できるような気持ちになった拓実は、ジャンプを何度もして、返事した。「拓実、頑張る。歌も、ダンスも、頑張る。小学5年生になったら、オーディション受けられるの？」亜紀は、よくわからなかったが、調子に乗せるために適当な返事をした。「ほら、スマップのシンゴ君、小学生からジャニーズって言ってたじゃない。とにかく、早くても、小学5年生ぐらいからじゃない。歌もダンスもやるんだから」拓実は、目を輝かせて、返事した。「そう～、それじゃ、小学校行く」亜紀は、思ったより簡単に拓実を誘導できたことでホッとした。さらに、ボクシングに誘導することにした。「ジャニーズに入るには、ダンスができないといけないのよね。でも、ダンスって、とっても、体力がいるんじゃない」

18

拓実は、大きくなずき、返事した。「もちろんさ。3分、踊っただけで、へとへとなるんだ。だから、毎日、練習しなくちゃいけないんだ」うまく、話に乗ってきたと話を続けた。「そ～、そんなに大変なの。ということは、筋力をつけなくちゃいけないってことよね。おねえちゃんは、シェイプアップするために、ボクシングを始めたんだけど、拓実も、やってみたら？ きっと、筋力がついて、ダンスも上達すると思うんだけど」拓実は、ボクシングとダンスは、全く違うと思ったが、ボクシングの軽快な動きは、ダンスに役立つような気になった。「ボクシング？ 役立つかな～。ボクシングって、軽やかなステップを踏むよね。あれって、ダンスしてるような気もする。僕も、やってみようかな～」

亜紀は、うれしくなって、拓実を抱きかかえた。最近、拓実をほめるたびに抱きかかえていた。「あ～～、おねえちゃん、苦しい。も～いい」亜紀は、即座に床に降ろした。「おねえちゃん、うれしくなると拓実を抱きしめたくなるのよ。よし、一緒に、ボクシングやる～。サンドバッグをたたく前に、シャドーボクシングをやる。こうするんだ」亜紀は、ボクサーの真似をして見せた。拓実も左ジャブと右ストレートを繰り返した。「決まってるじゃない、その調子。きっと、ボクシングは、ダンスに役立つから。毎日、やる～。ガンバ」拓実は、なんとなく、ボクシングが面白くなった。「なんだか、楽しくなった。これって、ダンスしてるみたい。楽しい」

亜紀は、拓実が学校に行っても、たくましくなれば、いじめられないように思えて、嬉しくなった。早速、拓実がボクシングを始めたことをアンナに知らせることにした。亜紀は、1階に降りるとアンナに話しかけた。「ママ、拓実が、ボクシングするって。すごくない。きっと、たくましくなると思う。亜紀も、ボクシングやる」アンナは、全く信じなかった。スカートをはいて喜ぶ拓実が、ボクシングをするはずがない。「そんな嘘は、聞きたくない。拓実が、ボクシング？ あ、オカマが。ママは、そんな嘘なんか、全くうれしくない。もっと、ママが喜ぶ嘘をつきなさい。亜紀は、シェイプアップのために、やりなさい。ママのように、サンドバック、毎日叩くのよ」

19

アンナが信じないのも無理はないと思った。亜紀も信じられないほどの拓実の変化だった。おそらく、拓実は、ボクシングをダンスの一種と思っているに違いなかった。一般人が思う格闘技とは思っていない。「ママ、嘘じゃない。本当だって。拓実が、すごく、面白いと言って、今、シャドーボクシングをやってるんだから。亜紀が、シャドーボクシングを教えたの。そしたら、やる気になったの」アンナは、まだ、信じられなかったが、これが本当だったら、奇跡が起きたと思った。「マジなの。拓実が、シャドーボクシング。それは、奇跡じゃない。ヤッパ、拓実も男だったか。よっしゃー、ビシバシ、鍛えてやるか」

亜紀は、アンナが鬼コーチになるんじゃないかと不安になった。「ママ、でも、ビシバシやらないで。拓実は、ボクシングをダンスと思ってるんだから。別に、ボクサーになりたいって、言ってるわけじゃないから。そっと、応援して」さやか、口をはさんだ。「アンナ、そう、意気込んじゃダメ。アンナの悪いところよ。拓実は、格闘技に興味があるんじゃない、亜紀ちゃんが言うように、きっと、ダンスのつもりなのよ。ボクシングは、亜紀ちゃんに任せれば？」アンナは、拓実に起きた奇跡に気持ちが高ぶっていたことを自覚した。冷静になったアンナは、亜紀に返事した。「そうね、拓実に奇跡が起きたのは、亜紀のおかげね。わかった。ボクシングマネージャーは、亜紀に任せる。ママは、そっと見守ることにする」

さらに、アンナを喜ばせる報告をすることにした。「ママ、拓実、小学校に行く気になった。これこそ、奇跡じゃない」目を丸くしたアンナは、跳びあがって、確認した。「マジ、マジなのね。よかった～～。ママ、ここ数日、眠れなかったのよ。本当に学校に行くって言ったのね。マジよね」亜紀は、うなずいた。「拓実、ジャニーズに入りたいんだって。だから、将来、オーディション受けさせて欲しい。いいでしょ。お願い」アンナは、学校にさえ行ってくれるならば、何でも、OK だった。「いいわよ。なんどでも受けていいわよ。でも、受けるのはいいけど、合格するのかしら？ すごく、難関と聞くけど。まあ、不合格になれば、身の程がわかって、いいかも」

20

亜紀は、アンナが機嫌がいいときにダンスと歌のレッスンをお願いすることにした。「ママ、亜紀もそう思うのよ。でも、奇跡ということもあるじゃない。お願いがあるんだけど、拓実に、ダンスと歌のレッスンをさせてほしいの」レッスンを反対する理由はなかった。学校に行くことを条件に、レッスンを受けさせることにした。「いいけど。でも、学校に行くという条件付きだから。学校に行かないと言ったら、レッスンも中止だから。いいわね」かなり厳しい条件を突き付けられたが、笑顔で返事した。「ありがとう。きっと、拓実、喜ぶ。問題は、ズボンを着てくれるかだけど。亜紀に、任せて。きっと、ズボンをはかせて見せるから」アンナは、頼もしい亜紀に感謝して、うなずいた。「亜紀、お願い」

21

不純な動機

4月11日（土）秀樹が遊びにやってくる日。午前10時過ぎ、甘党茶屋の駐車場にシルバーのベンツが駐車した。「坊ちゃん、いってらっしゃいませ」秀樹は、手土産の袋を手にとると車を降りた。大きく深呼吸した秀樹は亜紀ちゃんちの玄関に向かって歩き出した。亜紀は、今頃、どうして、遊びに来るのだろうかと思議だった。秀樹を拒絶するわけにもいかず、秀樹の申し出を承諾したが、なんとなく、いやな予感がしていた。亜紀は、インターホンが鳴ると玄関にかけて行った。「どうぞ。入ってください」秀樹は、身だしなみを確認すると、しらじらしい笑顔を作り、ドアを開けた。「こんにちは。亜紀ちゃん、お久しぶり、元気そうだね」亜紀も作り笑顔で返事した。「元気よ。上がって」

キッチンに通された秀樹は、出迎えてくれたアンナに挨拶した。「お邪魔します。今日も、一段とお美しいですね。どうぞ、父が送ってくれたお菓子です。よかったら、食べてください」お世辞を真に受ける能天気なアンナは、飛び切りの笑顔で返事した。「あら、そう。お父様から。うれしいわ。さあ、こちらに座って」アンナは、手土産を受け取ると

テーブルの椅子を引いた。亜紀は、子供のお世辞に有頂天になるアンナがバカに思えたが、口に出して非難はしなかった。アンナが、いつも、秀樹を歓迎するために、秀樹は気軽に遊びに来るのだったが、亜紀にとっては、かなりの迷惑だった。ちょっと気取ったアンナは、秀樹と亜紀の前にオレンジジュースのグラスを差し出した。「お土産、みんなでいただきますよ」

アンナは、手土産の菓子箱を取り出し、笑顔を作った。「あら、バームクーヘン。おいしそうね」秀樹が返事した。「銀座ねんりん家のバームクーヘンは、有名なんです。僕が好きだから、毎月、送ってくれるんです。とってもおいしいですよ」亜紀は、笑顔でバームクーヘンを見つめた。でも、即座に、顔色を変えた。というのも、ここ当分、甘いものを控える決意をしていたからだ。「とってもおいしそう。少しいただく」アンナは、ダイエットを気にしていると判断し、亜紀をフォローした。「秀樹君、亜紀ったら、甘いもの、気にしてるのよ。ダイエットしなさい、って言ったものだから。それじゃ、亜紀は、ちょっとだけね」

22

アンナは、バームクーヘンを送ってくれた秀樹の父親にお礼を言うつもりで、父親の話 시작했다。「お父様は、東京勤務でいらっしゃるのね。お父様にお礼を言うておいてください。そう、今、東京は、コロナ感染でパニックじゃない。お父様は、お元気？」秀樹は、ちょっと、うつむいてしまった。「それが、もしかしたら、感染しているかもしれないんです。父は、3月中旬に、スウェーデンで行われた役員会議に出席したんです。その時に感染したかもしれないんです。まだ、何の症状も出ていないんですが」アンナと亜紀は、顔が引きつった。今まで、身近かな人が感染していなかったため、それほど深刻に考えていなかった。でも、今、身近な人の感染の可能性を聞かされ、一瞬、ショックを受けた。

アンナは、まだ感染がはっきりしていないため、深刻にならないように慰めた。「そう、でも、陽性かどうかは、はっきりしてないんだし、あまり、心配しなくてもいいんじゃない。症状も出てないんでしょ」秀樹は、小さくうなずいたが、かなり落ち込んでいる様子だった。「そうですね。感染してないことを祈っています。でも、ヨーロッパからの帰国者に、陽性者が多いんです。イタリア、フランス、スペインでは、数十万人の感染者が出ています。とても、心配です。運が悪いことに、父は、糖尿病なんです。万が一、感染していたら、死ぬかもしれません。基礎疾患がある人は、致死率が高いと聞いていますから」

死ぬかもと聞いた二人は、顔を見合わせて、目を丸くした。亜紀は、何と言って、慰め

ていいかわからなかったが、とにかく慰めることにした。「死ぬなんて、言っちゃダメ。感染したわけじゃないし、入院したわけでもないんだし。そう、悪い方に考えては、ダメ。症状が出ていないということは、感染していないってことじゃない。大丈夫だって」小さくうなずいた秀樹だったが、さらに不安を述べた。「そうだったら、いいんですが。でも、感染して、一か月以上たって、症状が出る人もいるそうなんです」ますます話が深刻化してきた。このままでは、通夜の会場になってしまうと思い、アンナは話を変えることにした。「ところで、秀樹君、3月からひきこもりじゃない。毎日、何やってるの？」

23

秀樹にとってひきこもりは地獄のようだった。クラブで大好きなサッカーができないだけでなく、勝手に仲間を集めてサッカーをやれば退学という厳しいお達しが学校からなされていた。「もう、ひきこもりはうんざりです。毎日、ゲームじゃ、飽きてしまった。いったい、いつまでひきこもればいいですかね～。亜紀ちゃんは、何をやってるんだい？」亜紀もひきこもりにはうんざりしていたが、コロナに感染しないためには、ひきこもりが最適な策だと承知していた。弱音を吐きたくないために、前向きな発言をした。「亜紀は、別に、ひきこもりは苦にならないけど。勉強がはかどるし、拓実とも遊べるし、来月もひきこもってもいいと思ってるぐらい」

意外な返事に驚きを隠せなかった秀樹は、目を丸くして返事した。「ひきこもりが、苦にならない。まったく、信じられない。こんな退屈な生活が、苦にならないなんて、亜紀ちゃんって、根っからの、ひきこもりなのか？ 僕には、耐えられない。一刻も早く、サッカーをやりたい」亜紀が、諭すように返事した。「あのね～～。勉強も、スポーツも、自主的にやるものじゃない。私なんか、飛び級試験のための勉強やってるし、健康のために、筋トレもやってる。要は、やる気よ！」手厳しい指導を受けた秀樹は、ムカついたが、筋トレと聞いて、どんなことをやっているのか興味があった。今は、サッカーができないが、サッカーができるようになった時には、筋トレは役立つと思った。

ドヤ顔の亜紀に、秀樹は質問した。「亜紀ちゃん、筋トレって、何をやってるんだよ。俺も、やろうかな～～」スポーツで自慢したことがなかった亜紀は、ちょっと自慢したくなった。「そう、人に教えるほどのことではないけど、ランニングでしょ、縄跳びでしょ、スクワットでしょ、それに、ボクシング。まあ、こんなところだけだ」ボクシングと聞いた秀樹は、一瞬身を引いたが、どんなことをやっているのか知りたくなった。「ボクシングって、どんなことやるんだい。ボクシングジムに通ってるのか？」ちょっと苦笑いした亜紀は、返事した。「ボクシングジムになんかには、通ってないわよ。あくまでも、テニスをやるための筋トレなんだから。二階に、筋トレルームがあって、そのサンドバックを前後左右のフットワークを使って、ガンガン叩いてるってわけ」

ゴルフをやっていることは知っていたが、テニスもやっていると聞いて、質問した。「え、ゴルフ以外に、テニスもやってるのか。亜紀ちゃんって、スポーツ好きなんだな～。意外だったな～。どこのスクールに通ってるんだ？」スポーツ好きと言われ、誤解されたようだったが、素直に答えることにした。「カツラスポーツアカデミーのテニススクール。ママが、勧めるものだから」有名なスポーツアカデミーと聞いてうなずきながら話を続けた。「世界的に有名なカツラスポーツアカデミーか。そう、そこには、美人の杉山コーチがいるんだよな。いいよな～。俺も、杉山コーチに指導してもらいたいな～～」

亜紀は、あきれた顔で返事した。「何言ってるの。秀樹は、サッカーでしょ。テニスやったこともなくせに。テニスって、見かけと違って、地獄のようなスポーツなんだから。秀樹は、やんないほうがいいよ」地獄のようなスポーツと聞いて、腑に落ちなかった。「え、テニスって、地獄のようなスポーツなのか？ 楽しそうに見えるけどな～～」亜紀は、ムキになって練習内容を説明し始めた。「あのね～～。楽しいってもんじゃない。毎日、死ぬほど走らされて、心臓が破裂しそうなんだから。そのうえ、杉山コーチから、毎日、叱られて、気が変になってるんだから。本当は、やめたいんだけど、ママが、桃栗三年柿八年、っていうからやってるだけよ」

ほとんどのスポーツは走るから、走るのが地獄といってしまうえば、すべてのスポーツは地獄になってしまう。秀樹は、亜紀の大げさな言い方をあざ笑うように返事した。「亜紀ちゃん、スポーツというのは、走るんだ。サッカーなんて、走ってばかりさ。野球だって、走らなければ、捕球できないし。バスケも走りながらドリブルするし。テニスも走らなければ、ボール打てないじゃないか？ 亜紀ちゃん、杉山コーチは、全く、当然なことをやらしてるんだよ」アンナは、秀樹の物わがりの良さに感心した。「さすが、秀樹君。そうなのよ。スポーツの基本は、脚腰の筋力。走るのは、そのためのトレーニングなのよ。亜紀は、そこがわからないのよ。さぼってばかりで、練習意欲がないんだから。これじゃ、上達しないわね。秀樹君、もっと、言ってやって」

秀樹は、亜紀を責める気はなかったが、アンナの口出しで亜紀を責める結果になってしまった。亜紀を怒らせたみたいになってしまい、秀樹は気まずくなった。話題を変えるために、ことわざの話をすることにした。「そう、亜紀ちゃん、さっき、桃栗三年柿八年、って言ったよね。こういう場合、石の上にも三年、っていうじゃないか？」亜紀は、目を吊り上げて、返事した。「そんなこと、ママに聞いてよ。ママがそういうんだからしょうがないでしょ」秀樹は、アンナの顔を見つめた。アンナは、何のことを言われているのか、意味が分からなかった。「桃栗三年柿八年、のどこがいけないの？ 言いたかつ

たことは、何事も、最低、3年は、頑張りなさい、って言いたかったのよ。まったく、間違っていないと思うんだけど」

秀樹は、アンナの説明を聞いて、なるほどうなずいた。この場合、石の上にも三年、のほうがふさわしいと思えたが、桃栗三年柿八年も、的を射てると思えた。何事も上達するには、時間がかかる、と考えれば、このことわざも使える。「そうですね。アンナさんは、才色兼備なんですね。さすが、亜紀ちゃんのお母さまでいらっしゃる」生まれて初めて才色兼備といわれたアンナは、笑顔で返事した。「そう～～、ほめられると、照れるわね。料理は、特に得意なのよ。お昼、何が食べたい。糸島牛と糸島豚を使ったハンバーグ、どうかしら」秀樹は、笑顔で返事した。「お言葉に甘えて、いただきます」アンナは、すっと立ち上がり昼食の準備にとりかかった。亜紀は、あきれて、開いた口がふさがらなかった。

アンナが席を立つと同時にさやかが、二階から降りてきた。さやかがキッチンにやってくると秀樹が挨拶した。「さやかさん、お久しぶりです。大学もお休みですよ。まったく、ひきこもりは、退屈で、退屈で、死にそうです」さやかは大学生、と今も勘違いしていることに罪悪感を感じたが、敢えて、否定しなかった。「そうなのよ。ひきこもりって、退屈ね。今日は、亜紀ちゃんと憂さ晴らしね」秀樹が、返事した。「まあ、退屈だったもので、亜紀ちゃんは何をしてるのかな～～とって、遊びに来たんです。亜紀ちゃんは、筋トレをやっていると聞いて、僕もやろうかな～～て、話していたところです。さやかさんも、筋トレなされてますか？」

26

さやかは、筋トレはしていなかったが、ランニングはやっていた。「ひきこもっていると、不健康じゃない。だから、ランニングマシーンで、走っているの。秀樹君は、サッカーができなくて、悔しいでしょ。でも、ひきこもっていても、工夫すれば、いろんな運動ができるのよ。スクワット、腕立て伏せ、腿挙げ、ジャンプ、サイドステップ、やれることは多いわよ」秀樹はうなずいた。「そうですね。亜紀ちゃんは、テニスもやってるそうなんです。しかも、美人コーチの指導を受けてるんです。亜紀ちゃんと一緒に、やろうかな～～とったりして」一緒にやると聞いた亜紀は、目を丸くして返事した。「イヤよ。一緒なんて。あのね～～。杉山コーチが、美人なのは、顔だけなのよ。心は、鬼ババ～～なんだから。生徒をしごき倒してるんだから」

秀樹は、笑顔で返事した。「僕は、平気さ。サッカーでいつも、しごかれているから、何ともない。僕は、美人コーチに、お尻をペンペンしてもらいたいくらいだ。それにしても、亜紀ちゃん、美人コーチを鬼ババ～呼ばわりは、失礼じゃないか。そうだ、杉山コー

チのサインもらってきてくれよ」秀樹の不純な心にあきれてしまった。「要は、テニスがしたいんじゃない、美人コーチに会いたいただけじゃない。まったく、男子は、これだから。いい加減にしてよ」さやか、秀樹の気持ちを汲んで話に首を突っ込んだ。「秀樹君、その意気よ。美人コーチの指導を受けたら、きっと上達は早いわよ。そうだ、亜紀ちゃんとミックスダブルスで、ウィンブルドンに出場すればいい。亜紀ちゃん、ガンバ」

ここまで悪質な冗談を言うとは、さやかはかなりの性悪女と思った。「何が、ミックスダブルスよ。いい加減にして。さやかおねえちゃん、頭おかしくなったの。秀樹は、サッカーだけやってればいいの。秀樹、わかった」すごい剣幕で怒鳴られた秀樹は、返す言葉を失った。さやかは、冗談が過ぎたと反省し、亜紀の機嫌を取ることにした。「冗談よ。今から、何やる？ 亜紀の得意なポーカーやりましょう」目を吊り上げた亜紀は、さやかをにらみつけていた。秀樹は、険悪なムードを払しょくするために、ピンクの話をすることにした。「そうだ。ピンクは、元気かな～。うちのひよっこは、毎日、食っちゃね、食っちゃね、して、バカ殿だよ。ワハハ～～」秀樹は、引きつった顔で笑顔を作った。

27

険悪なムードを感じ取ったアンナが、仲裁に入ってきた。「なんだか、話が盛り上がってるわね。亜紀もやる気が出てきたってことか？ いいことよ。これからの女子も、強くなるわ。ほら、痴漢とか、ストーカーとか、性犯罪が増えてるでしょ。いつも、女子は、泣き寝入り。これじゃ、ダメよ。女子も、戦うのよ。私なんか、若いころ、女子は男子には勝てないんだから、引っ込んで出ろと言われてたから、一発、回し蹴りをくらわせたんだから。なぜか、気絶しちゃったけど」亜紀が、あきれた顔で返事した。「それって、暴力じゃない。何の自慢にもならない」秀樹も目を丸くしてアンナを見つめた。

アンナは、暴力といわれ、反論した。「何が、暴力よ。これって、女性の権利主張なのよ。男子に屈服しては、いつまでたっても、女子の権利は守れないんだから」亜紀が、ムキになって反論した。「何が、女子の権利よ。気絶させるなんて、暴力の何物でもないじゃない。やさしさってものがないの？」アンナが、即座にその時の状況を説明した。「え、私がやさしくないっていうの。いい、私は、白目むいて気絶したものだから、救急車をすぐに呼んであげたのよ。警察に、すっごく、ほめられたんだから。命の恩人よ。秀樹君、私って、やさしいよね」秀樹は、なんと言って返事していいか戸惑った。救急車を呼んだことは、善行だが、そもそも、気絶させたのは、アンナだ。当然の行為でしかない。

秀樹は、なぜか、うなずいていた。「救急車を呼んだことは、ほめられることだと思います」亜紀は、顔を真っ赤にして、反論した。「何が、ほめられることよ。気絶させたの

は、ママでしょ。どこが、ほめられることよ。バッカじゃない」バカといわれ、アンナは、ムキになった。「バカとは何よ。救急車を呼んだから、命が助かったんじゃない。感謝されて、当然じゃない。さやかは、私の見方よね」さやかは、突然、振られて、目を丸くした。「とにかく、アンナは、喧嘩っ早いよ。喧嘩しなければ、気絶しなかったわけだし。女子は、話し合いで解決すべきよ。回し蹴りは、暴力といわれても、しょうがないんじゃない」

28

さやかまで敵に回ったと思ったアンナは、鬼の形相で話し始めた。「なによ、喧嘩っ早いわ。言っとくけど、回し蹴りは、れっきとした空手の技なんだから。武術の技を披露したまでよ。暴力だなんて、人間きの悪い。技をほめてもらいたいもんだわ。さやかも、わかってないんだから。秀樹君は、わかってくれるわよね」秀樹は、回し蹴りを単なる技と言ったことにおびえを感じた。万が一、敵に回ったら、回し蹴りの技を食らうような恐怖を感じた。「そうですね、空手の技です。その男子は、運が悪かったんです。気絶するなんて」アンナは、秀樹が味方について、満面の笑顔を作った。「ほら、秀樹君は、わかってくれるじゃない。空手には、寸止めというのがあって、あの時も、軽く当てただけなんだから。武術の心得は、守ってんだから」

亜紀は、これ以上話しても、アンナのアホはどうしようもないと判断した。「ママは、根本的に、どこかおかしいのよ。まったく、話が通じない。もういい」その時、リビングで人間の愚かな争いを見ていたスパイダーが、ワンと吠えた。亜紀は、スパイダーに返事した。「人間には、このようなバカがいるの。だから、戦争がなくなるの」亜紀は、アンナをにらみつけると拓実の様子を見に行くことにした。「秀樹、ママの味方なら、ママと話していていいわよ。ちょっと、拓実の様子を見てくる」亜紀は、すっと立ち上がり、階段に向かった。秀樹は、オロオロしながら、立ち上がった。「僕も、拓実君の様子を見てきます。亜紀ちゃん、待ってよ、僕も行く～～」スパイダーもシッポをワイパーのように振りながら、亜紀の後を追って行った。

筋トレ

筋トレ

著 春日信彦

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
